つ人々が自発的に取り組み始めるものであり、後者は、教会としての必要性から作られ、教会組織の中に位置づけられた奉仕職である。

このように、設置の主体がどこにあるかによって、活動の仕方や評価のあり方などで教会共同体とのつながり方におのずと差が出てくることが考えられるが、いずれの場合も教会による「公的な承認」が必要とされることには変わりがないだろう。

＊　生活の中での位置づけによって

また別の分類の仕方として、おもに時間的な面に現れる関わり方の違いによるものがある。ひとつは、一定の時間を奉仕職に当てる、という関わり方であり、これは信徒としての本来の召命によって求められる、家庭や職業などにおける生活での役割以外の活動として行うものである。それに対して、奉仕職自体を職業としたり、ボランティアであっても「フルタイムの仕事として奉仕する」（信徒を中心とした教会 P81）、というような関わり方がもう一方にある。

このような観点からも、教会共同体との関係についてそれぞれの種類によって違いが生まれてくるだろう。特にここで問題となるのは経済的な負担であり、奉仕職自体を職業とする場合、当然そのような問題に対処しなければならなくなる。その際、信徒奉仕職を推進するという立場からすると、「小教区や司教区の経済的負担を増すという恐れから信徒の奉仕職の制定がさまたげられてはならない」（教会奉仕職に関するアジア会議結論 56）ことは言うまでもない。

この問題はまた、その奉仕職の評価とも関わってくる。「共同体がニードの重要性と、信徒によってなされる奉仕職に目覚めれば、奉仕者を支える義務をそれだけ強く感じる」（同上 56）こととなり、必要とされる奉仕職が実現していくことになる。これまで司祭の奉仕職を支える必要性についてはかなり強く意識されてきたが、信徒に対しては、その必要性の認識と同時に、当然ながらそれを支えるという意識も乏しく、支えるための負担もほとんどなかったのである。しかし今後、「全教会―司教も司祭も信徒も―は、少しずつ、しかも絶えず、この責任に向かうよう教育される必要がある」（同上 56）だろう。

4) 存在としての奉仕　―― 障害者・高齢者・病者などの生き方を通して

一般に、奉仕や信徒奉仕職について考えるとき、そこで対象とされるものは、さまざまな行動や活動を指すことが多い。しかし奉仕には、そうしたあり方だけではなく、その人の存在そのものが奉仕の役割を果たす場合も数多く存在すると考えられる。すなわち、障害者、高齢者、病者などいわゆる活動にはなかなか参加しにくい人たちが、その生き方をとおして人々に大きな信仰や希望、愛を示すような場合である。

このような人たちと関わる人々は、その人たちの普段の生活の中で表される何気ない態度や表情、あるいはその人の置かれている立場から気付いたこととして語られる言葉などによって、人間が生きる意味や喜び、人間が生きる上で本当に大切にすべき事柄などに深く気付かされるのである。

このように、障害者、高齢者、病者などいわゆる活動には参加しにくい人たちも、参加が可能な活動を通して奉仕することに招かれていると同時に、それだけに限らずよりいっそう、その存在を通して奉仕することに招かれているといえる。

また、このような奉仕のあり方は、特定の役割を果たすという厳密な意味での奉仕職にはあたらないにしても、すべての人に開かれたものでもある。すべてのキリスト者が、それぞれが属する家庭・職場・地域社会などにおいて、個々の行動を超え、その存在全体を通してキリストをあかしする存在となることは、非常に大切な奉仕といえるだろう。